

【連載エッセイ 第4回】  
**経済学者が**  
くらしをあばく



**幸福**

**より良い**

# 暮らしと経済学

あなたにとって幸福とは何か。  
また、幸福な国家とはどんな国だろうか。  
すべての人びとの限らない欲求を  
かなえ続けることではなさそうだ。  
人は一人で生きていけない。  
たえず価値観の違う誰かとの  
関係性を保ちながら、  
自分自身の立場を確たるものに…。  
最終回は、経済学の視点から  
幸福のあり方をあばいてみようと思う。

## 松島 斉 (まつしま ひとし)

東京大学大学院経済学研究科教授  
経済学者。専門はゲーム理論。1960年東京  
都生まれ。1983年東京大学経済学部  
卒。1988年東京大学大学院経済学研究科  
博士課程修了。経済学博士。筑波大学社  
会工学系助教授、東京大学経済学部助教  
授などを経て、2002年より現職。アメリ  
カ・エコノメトリック・ソサエティー・フェ  
ロー。日本経済学会学会誌 (Japanese  
Economic Review) 編集長。

ベンサムは頭部だけは蠟でできている。悪  
ガキ学生がベンサムの本物の骸骨でサッカー  
して損傷したから作り物に換えたなどと、ど  
なたかにお聞きしたが、真偽は定かでない。  
まあ、もうどうでもいい。

こんなベンサムには有名なキャッチフレー  
ズがある。それは「最大多数の最大幸福」  
だ。ひとりひとりが幸せになれば、それは社  
会の福祉向上にとって一番好ましいことだか  
ら、そうなるような行為や政策をしましょう。  
なんとも無邪気な倫理観を主張されたものだ。  
しかしベンサムは、この主張を大真面目に突  
き詰めていって、「パノプティコン」と呼ばれ  
る刑務所の構想にいたった。

### 監視なき監視

人は自分の意思では必ずしも上手に幸福を  
実現できない、不器用な存在だ。子ども、病  
人、犯罪者にいたっては、とりわけそうに違  
いがないのではないか。ならば、国家が個人に  
干渉してその暮らしぶりを正さないといいな  
い。これを「パターナリズム(家長温情主義)」  
という。しかし、個別にいちいち干渉してい  
たのではあまりにコストがかかる。

そこで、ベンサムは一望監視システム、つ  
まり、「パノプティコン」という名の監獄を  
考案して、国家の意向に従順にふるまう個人  
を生産する仕組みを発明した。建物は円形で、  
大勢の囚人を収容できる。囚人には独房が用

### ベンサムのミイラ

ロンドン市内のUniversity College of London  
(UCL) という名門大学がある。学内のホール  
の通路には「ミイラ」が展示されている。哲人  
ジェレミー・ベンサム (1748-1832) の「自己  
標本 (オート・アイコン)」だ。ベンサムご本  
人の遺言にしたがって、ミイラは教授会にも出  
席されているとのこと。老害もここまでくれば  
あっぱれ。次ページの写真は、私がベンサムに  
初めてお会いした際の記念すべき一枚。

意されている。独房は円形の壁にぐるりと配置されている。円の中央には監視部屋の塔が設置されている。独房のドアは、監視部屋に向かって開かれている。こうして、監視人が常に全員を監視できる態勢が整う。

ただし、ちょっととした光の入り方の工夫によって、囚人からは監視人が見えなくなっている。囚人は、姿の見えない監視人にも監視されている気分になる。だから、国家の意向に、いつでも従順でいいといけない。

そのうち意向に沿うことが習慣になる。さらには、習慣は社会規範、つまり倫理的に正しい、と考えるようになる。規範に背くと、国家のみならず、社会の構成員からも非難されると思うようになる。自分もまた、他人が規範に背けば咎めたくなる。こうして、囚人は更生され、晴れて娑婆に戻れる。

パノプティコンでは、監視人一人で一度に大勢を更生できる。しかも監視人は、こっそり遊びに出かけても、囚人にはばれないのだからヘッチャラ。囚人に活動の自由を十分与えておいても問題なし。強制の弱い、「ソフトな」パターンリズムで十分効果ありなのだ。

パノプティコンが最良かどうかは別として、刑務所を、罰を与える場所としてだけでなく、囚人を社会復帰できるように更生する仕組みとするのには、賛成だ。実は、私の先祖にあたる明治の事業家、金原明善は、更生保護事業を日本で最初に始めたひとりだ。それまでは、刑期を終えても、厳しい「村八分」のために、犯罪を繰り返すしかなく、挙句は自殺してしまうこともあったそう。また、現在でも日本には更

生保護という考えがあまり根づいておらず、更生保護を担う事業所は不足していると聞く。残念な話だ。

## 高度福祉国家

パノプティコンは、国家が最小限の強制によって、国民を規律正しい行動に導くための装置だ。ならば、なにも刑務所に限ることはない。学校、病院、職場、あらゆる「公共の場」すべてに「パノプティコン・パラダイム」はあてはまる。

気づいてみれば、現代は、監視機能の付いた携帯通信の普及や、町中に監視カメラが設置されているなど、まるでパノプティコンのような「監視なき監視社会」だ。20世紀フランスの哲学者ミッシェル・フーコーによれば、パノプティコン・パラダイムとは、社会の隅々に張り巡らされる、社会の福祉水準全体を底上げさせることを目的とする「高度福祉国家」を実現させるための一大プログラム、なんだそう。

## 幸福を測る

では、国家の意向に沿う幸福の実現とは、どのようなものなのか。つまり、ベンサムという「幸福」とはいったい何なのか？ 残念ながら、その答えは、よく分からない、である。ベンサムは、みんなの幸福を比較したり足し合わせたりすることができると考えていたようだ。しかし、どこにそんな測定基準があるというのか。

20世紀終わりのころ、一部の脳科学者の間で、

脳活動を画像化するハイテク装置「fMRI」を使えば、幸福度の客観的基準がはずれは見つかるはずだと、大騒ぎしたことがあった。技術がいくら進歩したって、幸福の客観的基準など見つかるはずもなからうに。

奇妙な結果をもたらす心理実験を紹介しよう。幸福度の基準をなんとか説得的に決められたとしよう。この基準に照らして、もともと幸福度の低い人と高い人がいたとしよう。そして、前者は宝くじに当たったり、後者は大けがをした。ならば二人の間で、幸福度は、もちろん大逆転だ。しかし、しばらくすると、まだ傷も癒えないうちに、そして、宝くじの賞金もほとんど使っていないうちに、二人はもとの幸福度に戻ってしまった。これでは、けが人のほうが金持ちより幸福ということになり、どうも合点がいかなくなる。



筆者とベンサムのミイラ

幸福を測ることに意味がないわけではない。しかし、幸福を測ることは難しいし、そもそも幸福とは何かについて、われわれにはコンセンサスがなない。しかも、幸福がかなり不適切に定義されている場合でも、みんなそれになかなか気づこうとはしない。

## 選択の科学

では、経済学は、幸福をどのようにとらえているのか。経済学は、別名「選択の科学」と呼ばれている。経済学は、人びとがより良い選択をするにはどうしたらいいかを分析する。より良い選択ができればより幸せになれると考えるのなら、経済学は幸福を追求する学問、ということであろう。

こんな経済学の重要な特徴は、あなたにとってより良い選択と、私にとってより良い選択とを比べて、どちらがより重要か、といった、人間で比較したり、足したりするための特定の測定基準を、あらかじめ想定していない点にある。所得分配の公正さ、望ましい倫理のあり方などを考えていくと、いずれ個人間で比較することが必要になってくる。こんな場合に備えて、経済学は、どんな個人間の比較基準を想定しても、分け隔てなく分析することができるように、うまくしつらえられている学問なのだ。

しかし、実際に経済社会に生きる個人は、正しい選択をうっかり間違えたり、正しい選択ができない状況に追い込まれていたりする。よって、パノプティコンのような、ソフトなパターンリズムが、経済活動の随所で必要になる。

## ナッジ

例えば、健康管理に気を付けなければならぬのに、高カロリーの惣菜と低カロリーの惣菜が売られていると、どうしても自分の好きな高カロリーのものを買ってしまいがちだ。こんなとき、低カロリーの惣菜を目のつきやすい棚においておけば、高カロリーの惣菜に気づきながらも、正しく低カロリーのものを購入するように、消費者を誘導できる。

このようなちよつとした工夫は、消費者の選択のメニューを限定したり、消費者を強制したりはしない。ちよつと肩を押しされるだけで、消費者は、より良い選択へうまくコントロールされるのだ。このような工夫のことを、最近の経済学者は「ナッジ (nudge, 軽く肩をつくこと)」と呼んでいる。ナッジは、ベンサム流のソフトなパターンリズムと、実質的に同じことである。ベンサムのパノプティコンは、現代経済学にもしつかり息づいているのだ。

では、あなたは、こんなカロリー問題が、上述したようなナッジによって解決されることを、本当に望んでいるのか。本当は、この惣菜は高カロリーだという情報を教えてもらうだけで、あとは自分自身の力だけで解決したい、と思ってるんじゃないだろうか。

このような質問をすると、少なからざる人が、「ナッジを好まない」と答えるそうだ。どんなにソフトであっても、パターンリズムからできる限り逃れていたい。他人から干渉されず、自律的(自立的)でありたい。こんな風に願っているのだ。

## 自律的個人

パノプティコンの主である国家が意図する福祉理念は、自明なものでも、きちんと基礎づけられたものでもない。だから、国家は、過去の経験から科学者、専門家、有識者の意見にいたるまで、さまざまな媒体を利用することによって、脆弱な理念を裏書することに余念がない。こうして、パノプティコンは、国家の意向に即するも、根拠のあいまいな、社会規範を生成する装置と化す。

パノプティコンから逃れたい、自律的でありたいとする人は、社会規範に照らして、良くない行いだ、などと他者から非難され、押しつぶされそうになる。だから、高度福祉国家と自律的個人は、手を取り合うことなく、絶えず緊張関係に置かれる。

例えば、今年東大を卒業する「私」は、ITベンチャーに就職したい。しかし、家族は、とある大手企業に「普通に」就職しろ、と反対する。大手に普通に就職すれば、家族から称賛されることになる。結局、優秀な東大生である「私」は屈服し、就職初年度からコピー取りにいそむことになる。なんてむなし。



福祉は大いに結構。だけど、つまらない倫理感に押しつぶされるのは御免こうむりたい。だから、私は、一市民として、そして経済学者として、幸福の実現とは、自律的であり続けたいとするエンドレス・ファイト、と定義したいのだが、みなさんはいかが？